

第1問 歴史と資料に関する授業において生徒たちが、「時代を超えた変化」というテーマで資料を調査し、発表を行った学習活動の成果である。各班の発表資料を読み、下の問いに答えよ。

A班の発表

図1 旧石器時代の人（港川人）の歯



図2 縄文時代の人（縄文人）の歯



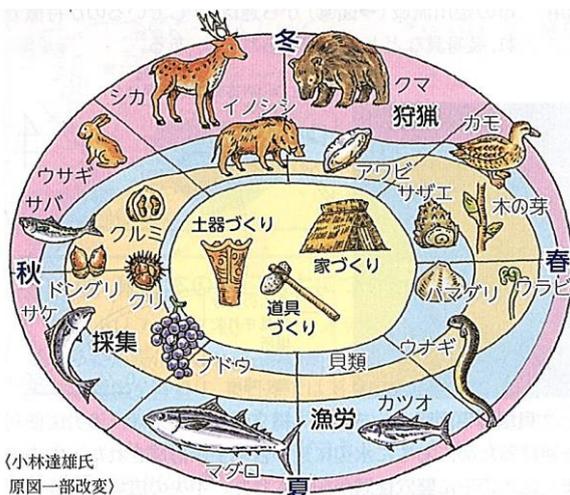
図1と図2を比較したところ、図1も図2も歯の表面が平らになっていました。これは硬いものを食べ続けるなど、歯を酷使したためと考えられます。その一方で、図2には歯と歯の間に虫歯もみられます。これは気候の温暖化によって、縄文時代の人々の間に a)食生活の変化がおこったからだと考えられます。

問1 下線部 a)についてA班は下記の内容で、図3・図4を用いて説明した。発表原稿中の **I**・**II** にあてはまる語句の組合せとして適当なものを次から選び、記号で答えよ。

発表原稿

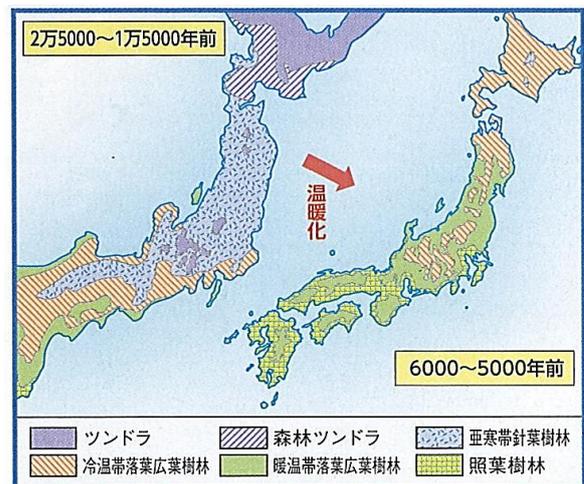
この変化の要因のひとつとして、植物性食料の摂取が増えたことが挙げられます。紀元前1万年ごろ、氷期が終わり温暖な気候となり、**I** が広がっていきました。特に落葉広葉樹林の木の実、クリやクルミ・ドングリなど種類・量ともに豊富であったと考えられます。そういった中で、縄文人は季節の変化に応じて植物性食料を中心に、計画的に食料を採取していたと考えられます。また、ドングリなどを食用とするにはあく抜きをする必要がありますが、**II** ことであく抜きができるようになりました。これによって食べることでできる植物性食料の種類も増え、炭水化物の摂取量が増えたために虫歯も生じたと考えられます。

図3



〈小林達雄氏
原図一部改変〉

図4



〈講談社「古代史復元2 縄文人の生活と文化」〉

- a 東日本は照葉樹林，西日本は落葉広葉樹林
- b 東日本は落葉広葉樹林，東日本は照葉樹林
- c 竪穴住居を営み，定住生活をする
- d 土器の発明により加熱・調理する

ア I-a II-c イ I-a II-d ウ I-b II-c エ I-b II-d

問2 A班の発表後，クラス内で次のような質問が出ました。これに対して，A班の生徒のみならずクラス全体の生徒が解答に困っていると，先生が3点資料を提示し考察の手がかりをくれました。それをもとに次の授業でA班が再度発表をしました。この際，先生が提示した資料として**適当でないもの**を選び，ア～エの記号で答えよ。

質問

旧石器時代の人骨の発見は，現在のところ国内では数か所しか見つかっていない(下表参照)。しかも，そのほとんどが沖縄なのはどうだろうか。

◆ 日本の更新世化石人骨 ◆

化石人	発見場所	推定時代
山下町洞人	沖縄県那覇市	約 3.2 万年前
白保竿根田原洞穴遺跡	沖縄県石垣島	約 2.7 万年前
ピンザアブ人	沖縄県宮古島	約 2.6 万年前
港川人	沖縄県八重瀬町	約 1.8 万年前
浜北人	静岡県浜松市	約 1.4 万年前

次の授業でのA班の発表

【考察】旧石器時代の人骨のほとんどが沖縄で発見されているのは，沖縄と九州以北の地域との土壌の違いが関係していると考えられます。沖縄は石灰岩地帯が多く，石灰のカルシウムは土壌をアルカリ性に保ち，人骨を溶かさず保存する効果があると考えられます。一方，九州以北の地域は酸性土壌が多く，人骨は容易に水分に溶かされるために残りにくいのだと考えられます。

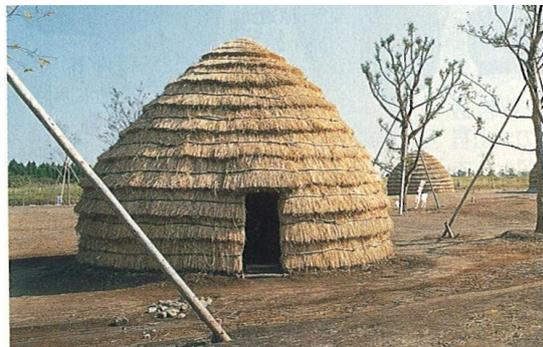
ア

相沢忠洋「岩宿の発見」

赤土の断面に目を向けたとき、私はそこに見慣れないものが、なにかは突きささるような状態で見えているのに気がついた。……それを目の前に見たとき、私は危うく声をだすところだった。じつにみごとというほかない、黒曜石の槍先形をした石器ではないか。完全な形をもった石器なのであった。われとわが目を疑った。考える余裕さえなくただ茫然としてみつめるばかりだった。……もう間違いない。赤城山麓の赤土(関東ローム層)のなかに土器をいまだ知らず、石器だけを使って生活した祖先の生きた跡があったのだ。

(相沢忠洋「岩宿の発見」講談社文庫)

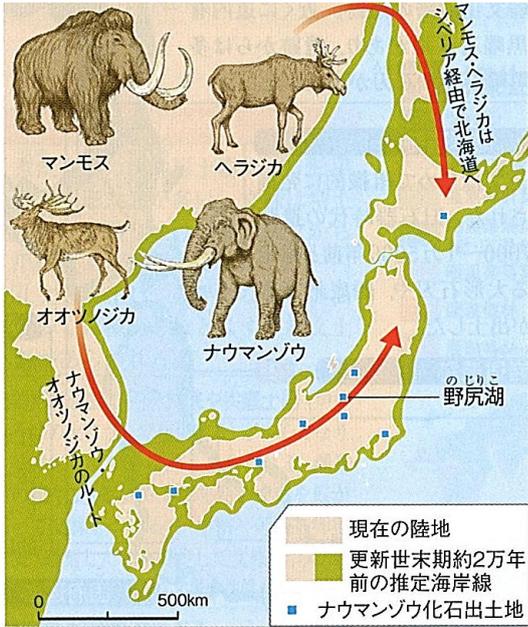
イ



鹿児島県上野原遺跡

霧島連山のすそ野から西にシラス台地が広がる標高 250 mの台地に位置している。

ウ



エ



B班の発表

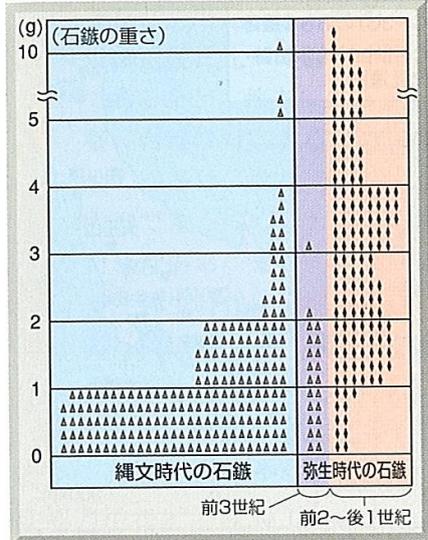
私たちは右図に興味を持ち、縄文時代の石鏃と弥生時代の石鏃の変化についてまとめました。

問3 下図は、B班が発表する際に用いたものである。図中のⅠ・Ⅱに入れるべき図や資料として適当な組み合わせを次から選び、記号で答えよ。

「弥生時代は争いの時代」

縄文時代 狩猟 … 弓矢の使用
[対象] イノシシ・ニホンシカ・鳥・ウサギ など

弥生時代 稲作の普及，農耕社会の成立
↓
余剰生産物・水利などをめぐって争い・戦いが発生
↓
争い・戦いへの備え … Ⅰ
↓
小国の成立 …………… Ⅱ



◆ 石鏃の重さの比較 ◆

a



b



c

…興死して弟武立つ。自ら使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大將軍倭国王と称す。

順帝の昇明二年、使を遣して上表をして曰く、「封国は偏遠にして、藩を外に作す。昔より祖禰躬ら甲冑を擻き、山川を跋涉して寧処に違あらず。東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐるること九十五国。…と。詔して武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大將軍倭王に除す。

d

建武中元二年、倭の奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武、賜ふに印綬を以てす。

安帝の永初元年、倭の国王帥升等、生口百六十人を献じ、請見を願ふ。桓靈の間、倭国大いに乱れ、更相攻伐して歴年主なし。

ア I-a II-c イ I-a II-d ウ I-b II-c エ I-b II-d

問4 次の文章はB班の生徒たちの発表の要旨である。IとIIに入る内容として適当なものを次から選び、ア～エの記号で答えよ。

縄文時代の石鏃は主に として用いられていたが、弥生時代の石鏃は、集落同士の争いの際の武器として ために重量が重くなっていると考えられる。

- a 狩猟のための道具
- b 漁労のための道具
- c 殺傷力を高める
- d 飛距離を伸ばす

ア I-a II-c イ I-a II-d ウ I-b II-c エ I-b II-d

C班の発表

私たちは奈良時代から平安時代にかけての仏像の制法や特徴の変化についてまとめました。

	奈良時代	平安時代初期	平安時代中期以降
制法	乾漆像・塑像	一木造	寄木造
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・従来の金銅像に比べて材料入手がしやすい ・乾漆像(脱乾漆)は体内が空洞のため軽い。 ・塑像は年度を使用するので自由な造形が可能 	<ul style="list-style-type: none"> ・頭部と胴体を一本の木材から制作する ・肉が厚いので深く彫れる ・ <input type="text" value="X"/> 	<ul style="list-style-type: none"> ・2材以上の部材を寄せ合わせる ・短時間での制作が可能 ・ <input type="text" value="Y"/>

問5 表中のX・Yに入る語句の組合せとして適当なものを次から選び、ア～エの記号で答えよ。

- a 漆を大量に使用するので高価
- b 形・大きさに制限
- c 衣のしわを波が翻るように表現
- d 大型の仏像も制作可能

ア X-a Y-c イ X-a Y-d ウ X-b Y-c エ X-b Y-d

問6 下図はC班が発表する際に用いたものである。図中のZの部分の説明に**適当ではない**資料を次から選び、ア～エの記号で答えよ。

